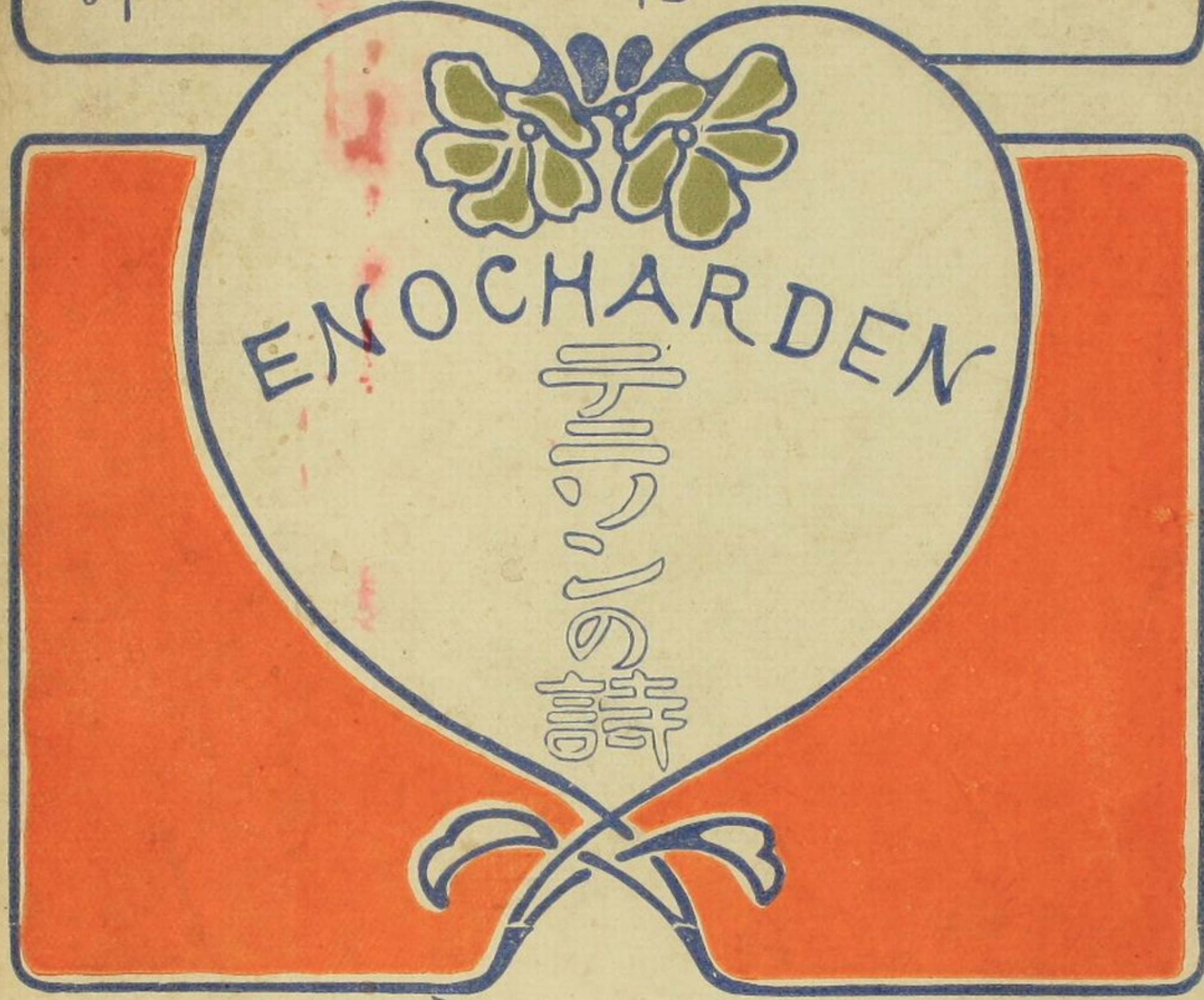


譯 錦 花 江 入 著 巽ニソニテ



版 蘇 會 志 同 學 文 京 東



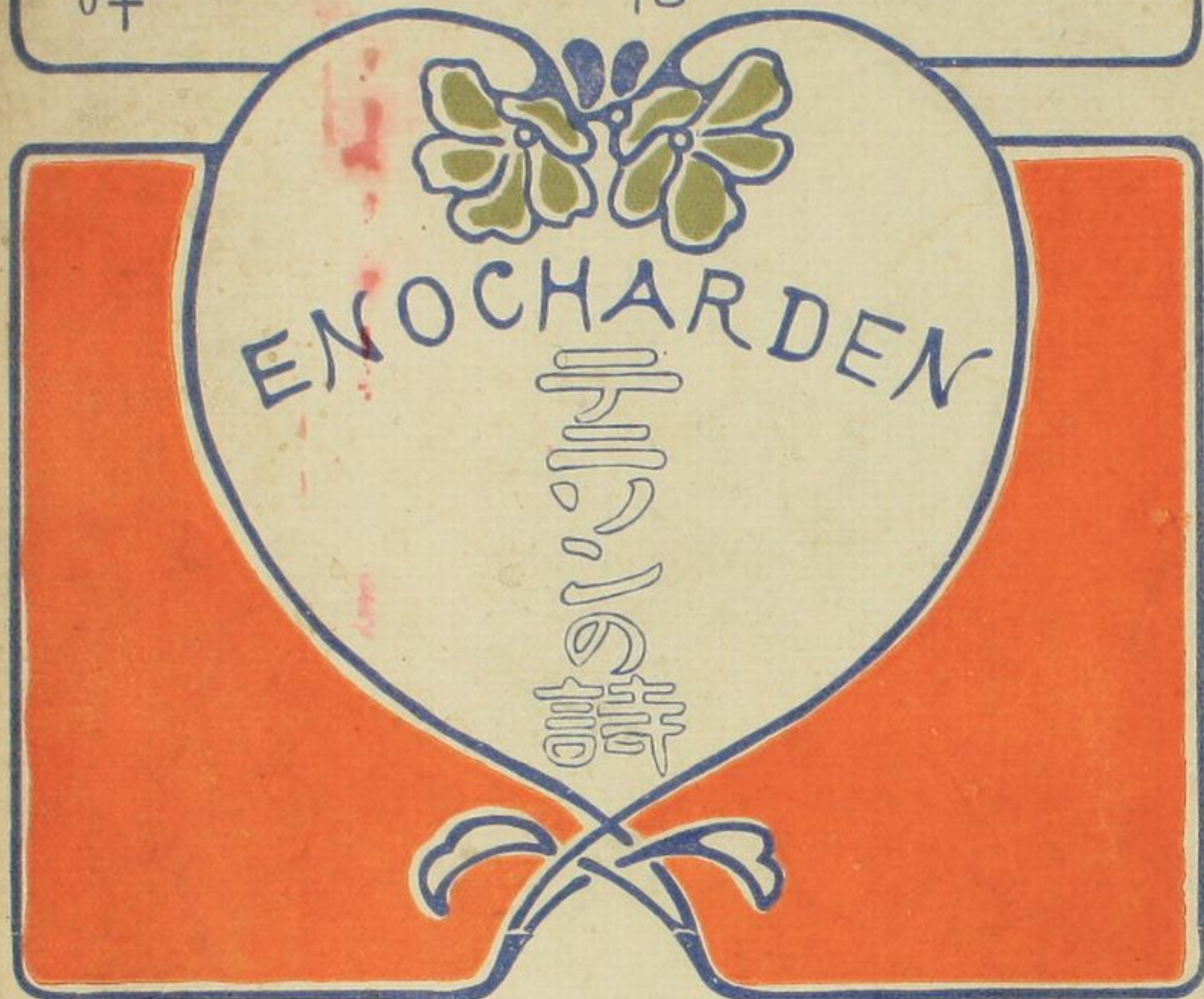
テニソンの詩

全

文學同志會藏版



譯 錦花江入 著 幾ニソニテ



版 藏 會 志 同 學 文 京 東

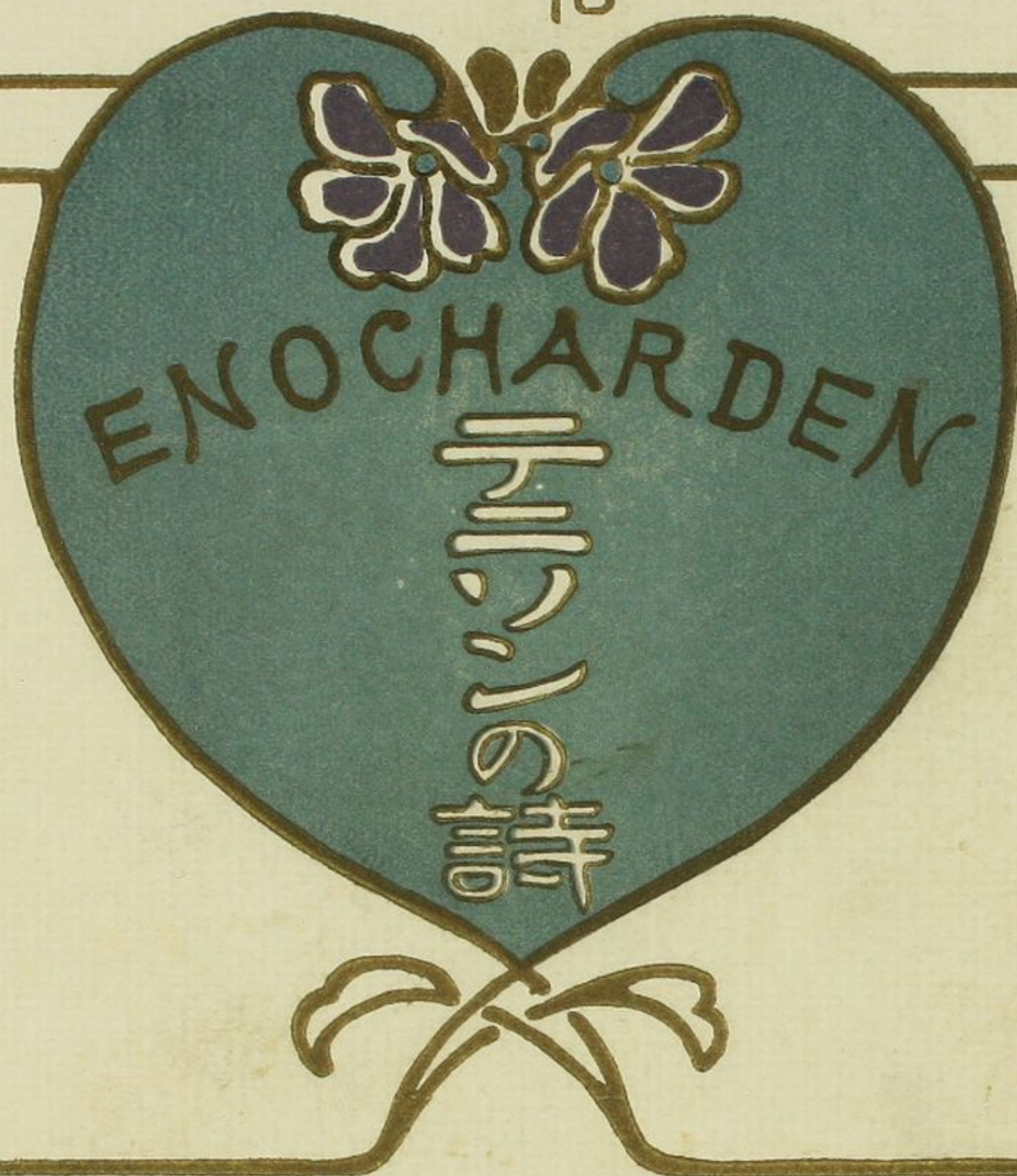
テニソンの詩

全

文學同志會藏版



譯 錦花江入 著 巽ニソニテ

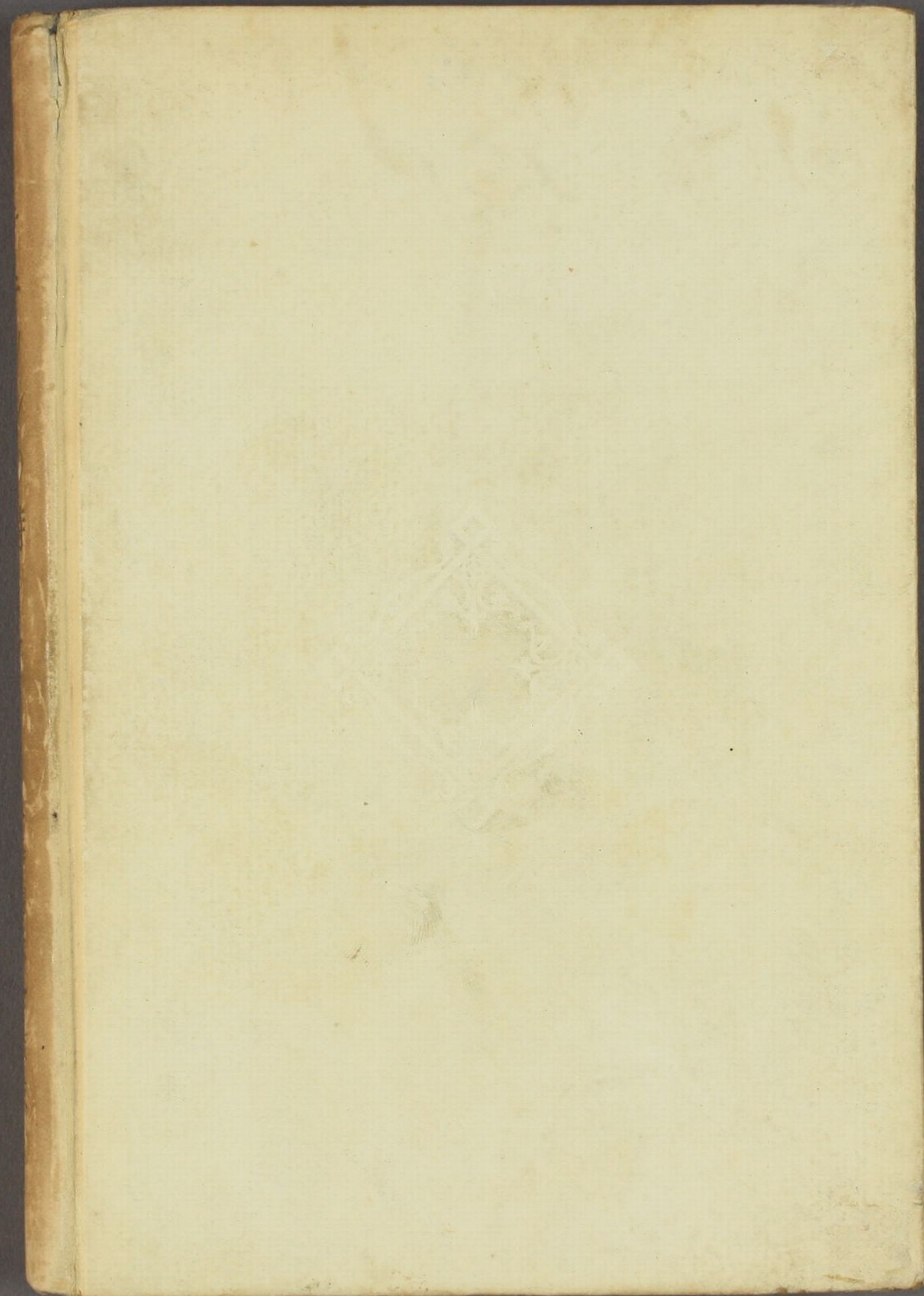


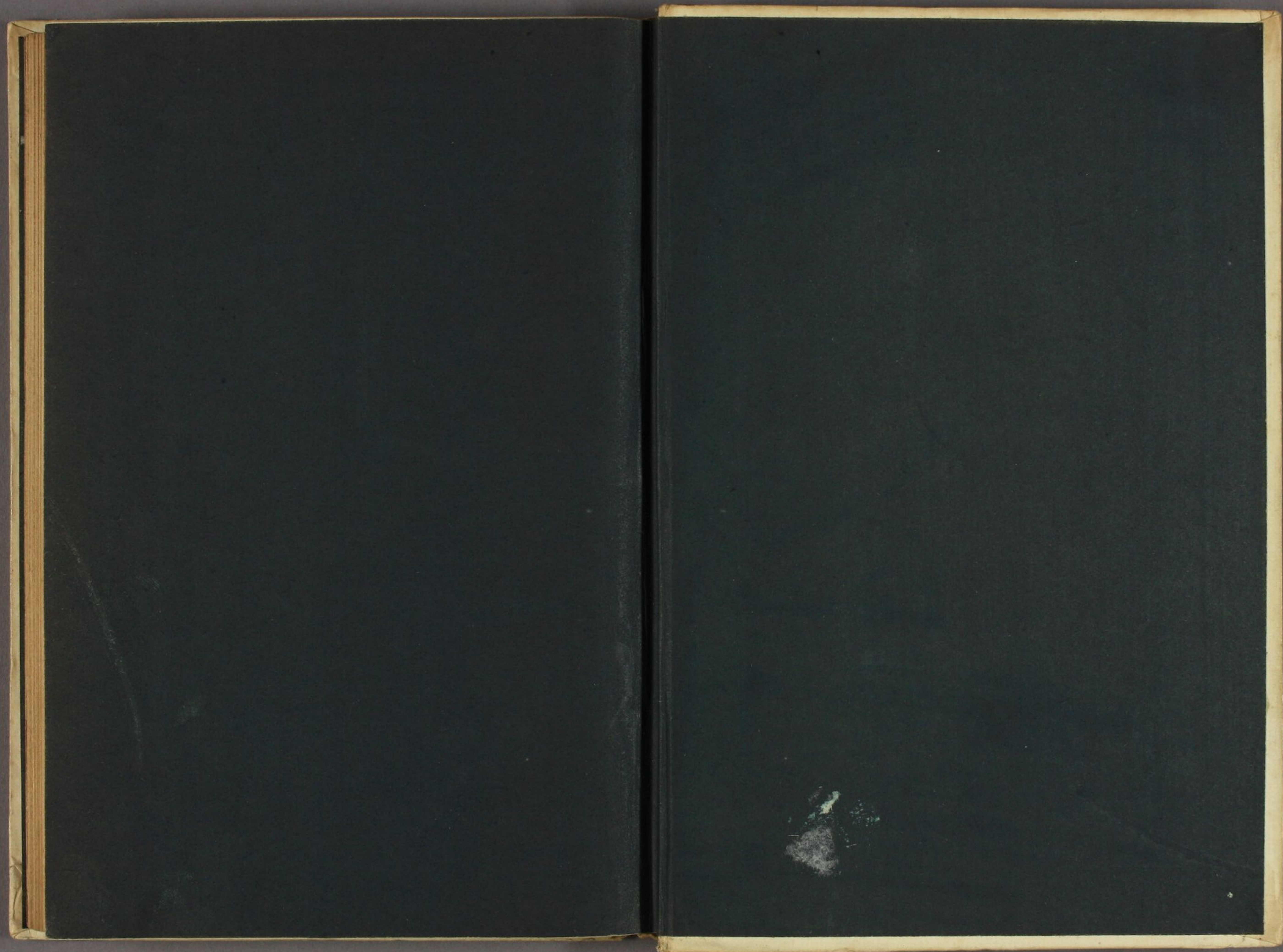
版 藏 會 志 同 學 芥 京 東

テニソンの詩

全

文學同志會藏版





“Too hard to bear! why did they take
me thence?

O God Almighty, blessed Saviour, Thou
That didst uphold me on my lonely isle,
Uphold me, Father, in my loneliness
A little longer! aid me, give me strength
Not to tell her, never to let her know.
Help me not to break in upon her peace.
My children too! must I not speak to these?
They know me not. I should betray myself.
Never: no father's kiss for me—the girl
So like her mother, and the boy, my son.”

序

チヨースアー一度『カンタベリー物語』を書きてより、英國の詩壇はげに古きものから、なほ詩人としての天職を自覺し、詩のために歌ひたる詩人は幾許もあらざらん。あはれ、情想の高雅と詞藻の清新とをもて、十九世紀の後半に聞えたるテニスンこそ其が中の一人ならんか。詩は彼が食物なりき。血なりき。はた生命なりき。彼はよくそれを知れりき。知りて詩に活きんと力めたるなり。げに彼が奏づる調には現世ならぬ響を宿せり。

バイロンは一朝夢醒めて自ら大詩人たるに愕きき。されど、テニスンが天才は摯實、忠誠、熱心、はた努力なりき。

其の『ジスキッピング、ロープ』より『アイディルズ、チヴ、ジ、キング』中の絶唱に至る進境！精勵！研磨又研磨、洗鍊又洗鍊。そは諸の詩人の、まことに師表とすべきものならずや。惟ふに、彼はうら若き明治の詩壇に推薦せらるべき詩人の一人ならん。

『エノック、アーデン』は固より彼の白眉の作にはあらざるも、彼が篇中の人物に對する同情の程は、紙表に溢れて掲焉なり。讀む者誰かはエノックが高潔の情に感ぜざらん。一言を述べて、序にかふとしかいふ。

吉備の御民 佐藤旭望

テニソンの詩に題す

松廬主人 正彦

嗚呼神よ愛乃久阿傳妻をこひ子を思ふ神は愛乃久阿傳

嗚呼神よ人の憂瀨は多かれどはしき妻はも今は人妻

嗚呼神よやまとの國にありもせばあに人妻と歌はせまし

や

嗚呼神よ神のしはさをそのまゝにまねび盡せる此の原つ

文

嗚呼神よ言葉國風かはれるをかはらで見する此の譯し歌

序

詩は人生の批評なり。世には詩歌を以て、たゞ單に吾等の美的感想を謳へるものとのみ思へるものあり。されば開は詩歌一部の生命のみ。詩歌の眞正なる目的は、偉大なる思想を意義あるものとして、美はしく咏み出したるものならざる可らず。換言すれば、人生を批評しえたるものならざれば、未だ大なる價値を認容すべからざる也。

熟々當代の我が詩壇を看よ。吾人は、そこに幾干か人生の批評をきゝうべしとするか。彼等は最もよく人生とよぶ。而もその作の上に、何程の人生の係を描き出せりとする。かくても尙人生の縮圖と誇りうべくんば、彼等の人生とはそも何の謂ぞや。吾人はかの天真爛漫の所生たる我が往古の和歌が、彼等の所謂人生の詩歌よりも、却てよく人生の機微に接觸せるものあるを見る。おもへば、今の詩歌は、寧ろ人生を偽るもの多かりけり。彼等がとりて題目とするもの、何ぞ爾くなぐはしきや。而もその歌ふところの思想に至りては、淺薄にあらざれば、則ち狹隘のみ。人生の批評と相距る、まことに遠

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "序" and "文".)

し。

泰西詩宗のたふとむべき所以の一は、よく人生の縮圖を描きたるにあり。忠實に人生を批評したるにあり。吾が邦の詩人が學ぶべきもの、須らくこゝに存せざる可らず。然るに彼等徒にその想の形を模して、在來の本邦詩壇に、新たなる生命を興へたりとなす。何ぞ覺らざることの甚しきや。吾人は毫も本邦の詩界が、彼等によりて、かゝる眞生命を得たるものあるを認めず。ただ人生を偽る戯れの詩の多きを見るのみ。

余はテニソンの詩を愛す。开は彼が詩の爲めに忠實なりし故を以てのみに非ず。又その莊麗にして幽玄なる詩風を悦ぶが爲めに非ず。まことに其の詩の人生の批評たる價值に背かざるが故なり。げに彼れの詩や大なりと謂ひつべし。

『エノック、テーデン』は彼が雄麗なる筆によりて、神聖なる戀を描きたるものなり。世に戀を語るものは多し。而も多くは女々しき戀のみ。慾張りたる戀のみ。盲目の戀のみ。無意義の戀のみ。而も尙自ら稱して神聖の戀なりと

云ふ。陋も亦極まれりといふべし。吾人はエノックの戀のいかに温かく、いかに清くして、いかに高きかを歎ぜずんばならず。テニソンが如き筆にして、エノックが如き戀を謳ひたるものに非ずんば、いかでか、よく人生の批評たり得んや。

盖し文學の内容は、取材の價值そのものよりも、先づ作家の手腕に待たざる可らず。本邦の詩壇が好平の題目に接しながら、毎に偉大なる價值を發揮し得ざる所以のものは、實にこの良匠の斧に觸れざるに由らむのみ。テニソンにあらざれば、エノックの戀、終に語るべからざる也。

吾人は名譽ある此譯詩に序する資格なし。されど思想の不健全なる今の世にあたりて、かくの如き偉大なる戀をたゞふる榮を得て、轉た譯者の請ひを否み難きものあり。乃ち拙き筆をかりて人生のおもかげを偲ぶのみ。敢へて序すといはんや。

花錦兄に與へて序に代ふ

こゝに人の子怖れあり
晝となりまた夜となり
星と照りまた花と咲く
暗と光をあやなせる
秘密の中に活きんには。
こゝに人の子迷あり
からき浮世のうまさ戀
その唇の色あせて

肉體も靈魂も跡もなく
墓場の底に消えんには。

あゝ何處より何處ゆく

暗より暗の世の中の

怖れ、迷へる衆生に

陰より救ひ新らしき

光と熱をあらしめよ。

名もなき花にソロモンの

榮にもまさる影しのび

冷たき貝にわたつみの
自然の樂をさながらに
語りつたふは君が韻。

萬有暗きあめ地に

濁浪高きうつし世に

「真」と「美」の影ほのめかす

詩神の證をさながらに

歌ひさけぶは君が領。

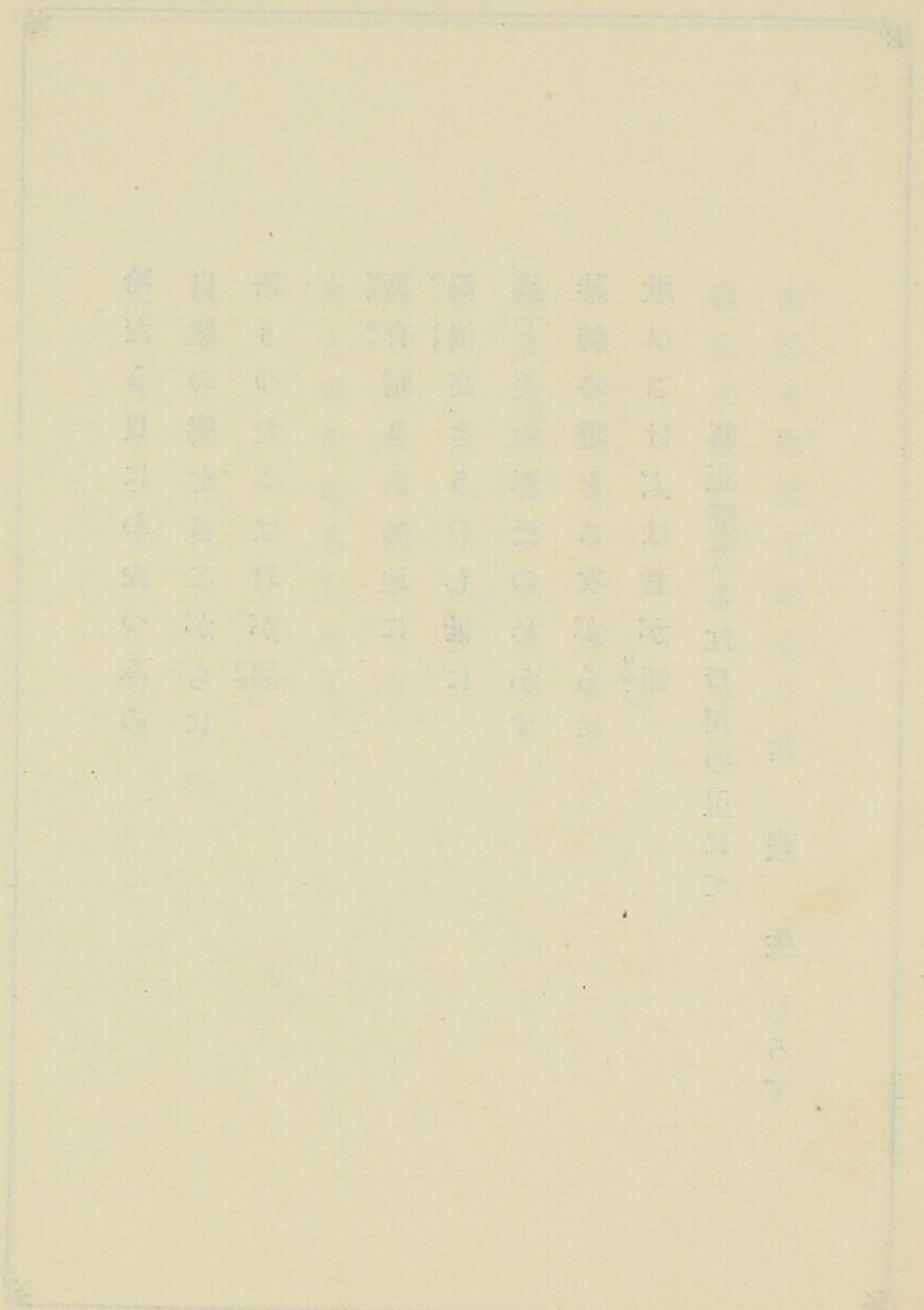
落花静なる江戸川の里にて

紫 蕨 生 するす

序 詩

英の下の詩の野に
星華と笑みて月桂の
冠に榮えしテニソンの
詩才を翳せし詩の篇。

テニソンの空の星と笑み
下界の夢ゆ醒めしより
「時」は移りて十餘年
薫や盡さず、聖の詩。



起 頭 ゆ 終 尾、 篇 の 中	光、 燿 く 愛 の 華。 如	聖 火 ！ 焔 と 映 ゆる 如	浪 や 沈 黙 の 闇 の 中	旋 風 な ぎ に し 大 洋 の 夕	吾 が 筆 消 し ぬ 懷 の 香	吾 が 筆 破 り ぬ 妙 の 韻	吾 が 筆 崩 し ぬ 美 の 姿	吾 が 筆 穢 し ぬ 映 の 艶
---------------------------------------	-----------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	------------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------

吾 が 野 の 花 と 移 し た る。	詩 趣 の 真 意 を 解 し 得 て	詩 聖 の 思 想 を 悟 り 得 て	詩 才 に 貧 し く 學 淺 く	抱 け ば 湧 く よ 愛 の 波	觸 れ ば 響 く よ 戀 の 韻	仰 げ ば 舞 ふ よ 幸 の 影	望 め ば 笑 む よ 映 の 彩
-------------------------------------------------	------------------------------------------------	------------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------	-------------------------------------------

け高く燦き、仰ぐ身に
涙の泉、湧きかへる
それだに吾筆移し得て。

さはれ、拙き身ながらも
戀愛に聖きエノツクを
敬慕ふや熱き吾が心――
谷めなましを僭越を。

明治三十八年二月九段中坂上
後素軒にて

譯者誌

三井先生に

「神來韻く詩の宮
扉や吾に固くして
詩園に笑まふ映の華
翳さん術なき小き身よ。

英字解さんの學淺く
外國空の詩の薫
艱ぐさへ難きをおほけなく
願ひや高し、烏澁の術。

あはれけ厚き師の恵
 謝さんの辭われ知らず
 許しね、拙き呼きに
 代りて陳べん、譯詩の卷。

花の曇りに

花

錦

生

いかで、詩聖の養育みし
 色香懐しき詩の華
 彼の野のまゝに移さんの
 詩才やはあらん、己が身に。

さるを辛くも吾が野邊に
 萎れの華とも移し得し
 吾が身にあまる此の榮光や
 あはれけ厚き師の恵。

前編

目次

其一 幼時の巻…………… 自頁 至頁

其二 青春の巻…………… 一 九

其三 結婚の巻…………… 一九 三六

其四 出航の巻…………… 三六 五三

中編

其一 待佗の巻…………… 五五 七三

其二 情移の巻…………… 七四 八〇

其三 逍遙の巻…………… 八一 一〇〇

テニソンの詩

エノック、アーデン

入江花錦譯

前 編

其 一

幼時の卷

—

後 編

其四 再婚の卷……………101……………116

其一 孤島の卷……………117……………135

其二 歸航の卷……………136……………145

其三 家郷の卷……………145……………173

其四 臨終の卷……………174……………210

目 次 終

空に聳ゆる砂山や
 ダニッシュ永眠れる塚幾多。
 秋たち来れば山幸の
 木實を得んと人集ふ
 榛の森みどり濃く
 眞砂榮光よき山腹の
 コップの如き窪地をば
 飾りて美はし、山の彩。

二

崖また崖の裂けし罅
 黄染め清き眞砂をば
 磨き流るゝさゝ流
 傍に岸を横這へる
 狭き埠頭の周囲には
 赤き瓦の家の簇。
 此に望みて荒寺、
 高き櫓の磨家まで
 連り登れる長さ街、
 抱きて立てる灰色の

百年遠きその昔
 しかく彩色る海岸の
 三つの伏屋に幼なき
 三人の髻髪子揃ひける、
 一人はアンニー、リと呼び
 浦には稀れの愛し小女。

磨者の一人子は
 その名をヒリップ、レイと言ひ
 粗剛水夫の童兒は
 エノック、アーデンと言ひけるが

冬の暴風に船破れ
 渠は孤兒とぞなりしとか。

三人が平素の遊戯や
 濱邊の藻屑、塵の中、
 固く結べる船の網、
 暗色深き漁網の下、
 鉤さへ錆たる錨の邊、
 磯に上げたる船の間。
 或るは砂にて城を築み

ヒリップ此れに替りつゝ、
 アンニ一常に妻の役。
 されど時にはエノックが
 一日交代を守らずて
 一週間をも主人顔
 「此の家庭、小妻は吾がもの」と
 呼べばヒリップ否定むらく
 「吾また同じ、交代」。

斯くて「主人」を争へば

汀に渦巻く浪の華
 崩し去るをば注視りつゝ、
 追ひゆき、飛び退き戯れつ、
 日毎に洗ひ流さるゝ
 小足跡刻みぬ、磯の上。

崖下の狭き洞の中
 此處をホームの家庭戲や
 主人の位置の一日を
 エノック占むれば翌日は

三

「兩^{ふた}人^りの妻^{つま}よ」と慰^{なぐさ}めつ。

其 二

青 春 の 卷

一
さ は れ 何^い時^つし か 髪^{かみ}髻^{むす}子^この
薔^{ばら}薇^ゐい る 曙^{あけぼの}の 空^{そら}過^すぎ て
日^ひ光^{かり}や 榮^はゆ る 風^{かぜ}雅^{みやび}時^{とき}代^よ、
若^{わか}さ 愛^{なさけ}情^けは 燃^もえ 出^いて、
二 人^{ふたり}の 想^{おも}ひ は 注^そが れ ぬ

身^みや 強^{きやう}剛^{ごう}の エノック に
抑^{おさ}壓^えら れ て ヒリップ は
悔^くし 涙^{なみだ}を 眼^めに 湛^たへ
恨^{うら}め し げ に ぞ 叫^{さけ}ぶ なる
『あゝ 疎^そま しの エノック よ』。

小^{ちい}さ 妻^{つま}は 憂^{うれ}は し く
仲^な間^まの 上^うを 想^{おも}ひ て は
か よ わ き 胸^{むね}に 忍^{しの}び 泣^なき
そ の 身^みの 爲^{ため}の 争^うを
や わ ら げ ま しの 嬌^{せう}心^{こころ}

願ふもアンニの愛の賛。
 ボイト、家屋を求めんと
 總ての貯蓄集めつゝ
 力の限り心して
 希望の影を舞はしめき、
 エノック常に眼の邊
 されど戀想の胸の琴
 エノックの上に韻かせつ
 如何に「自覺」の有らずして
 問はるゝ愛を拒めども。

愛しき一人の處女の上。
 燃ゆる想の胸の中
 エノック竟に語りしが
 同じ想のヒリップや
 語らず言はず唯だ獨
 熱き胸をば抱きつゝ
 秘めぬ、沈黙の戀と社。
 處女の愛の外見のみは
 ヒリップの上へ舞ふが如

捲き攫はれんの危険より
 三人を救ひ、人々の
 最負は落ちぬ、渠の上。

尙ほ青春の二十一
 榮光よき齡に先立ちて
 愛しアンニの愛の爲
 曾て想を凝らしつゝ
 熱望ひしポイト求め得て
 家屋をも竟に造営みぬ。

渠が幸よき身の榮光や
 渠が雄々しき大胆や
 危険に當る巧妙や、
 此の海岸の數哩、
 何處の浦にも一人だに
 渠に優れる者ぞなき。

嘗て一年商船に
 仲間に優る舵子住居、
 岸邊に猛ける巨濤に

登りし丘を辿りつゝ、
 先に立ちし人々の
 群衆に遅れて出てゆきぬ、
 看護る爲の(一)時間
 病の床に臥しますを
 ヒリップのみは(その父の
 包み、袋に籠さげて
 富者貧者の別ちなく
 榎果拾ひに伴れ立ちぬ。

職業休みて若者は
 秋の日の斜の夕まぐれ
 黄金の光、映清さ
 二
 狭き街場の半ば頃。
 磨家の方へ横這へる
 いと華車の建築式、
 艶麗華美は装はねど
 それにも似たる整頓や
 雛養育む小鳥の巢

榮ゆるか、胸の愛の影。
 句ふ聖火のその如、
 二人の眼、顔の中
 戀の潮通ひつゝ、
 沈黙の韻、齋らすを
 固く認めしヒリップや
 儂なき己が身の運命
 悟りぬ、あはれ「薄命」！と。
 聽て二人が顔と顔

渠が、窪地を飾りたる
 森傾斜の端の下
 眺めし刹那、想はずも
 眼に映りぬ、人の影
 エノック、アンニー手を連ね
 美しく佇む、妙の姿。
 青年の太き灰色の
 眼の燿、日輪の
 光線に染みし顔の紅
 美しき艶や祭壇に

抱きて孤身立ち去りぬ。

其三

結婚の卷

二人は竟に温かく
縁の神に結ばれつ、
朝夕、祝ひの鐘の音
楽しくこそは響きけれ、
年は笑まひの額に去り

互に寄せし接吻の姿
見るにえ堪はずヒリップは
吐息を後に爬ひ込みぬ、
手の負の獣、その如
森の窪地のその中に。

窪地や数多の人の群
笑ひ興ずる聲高く
渠は無限の悲哀に
愁ひ、悶えに沈みつゝ
終生去らぬ飢の心

二年過ぎてエノックの
 祈願は更に重りぬ、
 薔薇いろ紅の頬清き
 愛見や花と産れ出で。
 留守居の中のアン・ニーの
 快樂の生ける「本尊」よ。

貴き祈願に充されつ、
 貯蓄あつめにいそしみて
 己夫婦に優るべき
 教育を彼女に得させんと。

はやも七年過ぎゆきぬ。

身や健かに、不足なく
 互に愛でつ愛でられつ

榮光の勞働にいそしみて

幸よき月日送る時

快樂を翳す愛女さへ

渠等の家庭を榮えしめき。

愛女の呱呱の産聲聞きて
 エノック深く胸の中

渠かれが漁えて來こし海うみの魚うを、
 冬ふゆの暴風あらしに晒さらされし
 容貌かたち逞たくましき渠かれが顔おも。
 常つねに通かよひの繁しげくして
 唯ただだ、賑にぎはへる市いちの中ちゆう
 知しらるゝのみかは、砂山すなやまの
 背うしろ面の柴しば小徑せみち、
 閑静かんせいしき屋敷やしきの門口かどぐちに
 据すへつけられし彫刻きやく獅子しし、

巨濤おほなみ猛たけく荒あぶなる、
 海うみの彼方かなたに夫つま出いで、
 あるは陸方りくがのいと遠とほき
 彼方かなたに夫つまの旅宿たびねして
 心淋こころさびしき待ち詫わびの
 いと徒然つれづれの留守居留守どき時とき。
 實けにエノックぞ留守勝留守がまよ、
 渠かれの卒ひきゆく白しろき馬うま、
 藻汐もしほ句くまへる箴かごに積つむ

滑り落ちにき、高さより。
 登りし渠は誤りて
 湊に在りて帆柱に
 通ひ馴れしが、某の時
 陸ゆ、海路ゆ、幾度か
 湊や常にエノックの
 蒨苗は、浦ゆ北の方
 道程十哩隔たれる
 廣き湊に起りけり。

その家の庭園に生ひ立てる
 孔雀姿の苜込の
 榮光美はしき櫟の樹
 その邊にさへも知られたる、
 獸肉絶てる金曜の
 魚食をば渠が運びつゝ。
 定なきこそ世の姿
 移り變りのその命數に
 また泄れざりきエノックや、

渠は漸次に想像の
 「怪疑」、「憂鬱」の雲湧きぬ。
 想ひ亂る、胸の中
 悶え、惱みの昨日今日
 自由や辛き病床の上
 信仰の厚き渠なれど
 いと嚴格に、眞心に
 不幸の雲は集まりぬ。
 苦痛の影は現はれぬ、

近邊に在りし人々に
 助けられつゝ起きし時
 夢く渠の片足は
 挫けて暫時その浦の
 治療の床に悩めるを
 病身の稚兒さへ産れける。
 まして一家の生活を
 支へ來りし商業も
 他の商人の勢力に
 奪ひ去られて渠の上

商船長あつれ來りける。
 商船長、渠の人格
 深くも知りて愛でるしが
 苦しき境遇憐みて
 支那往き船に、水夫長
 用ゐたき旨告ぐるべう
 同情厚さ、愛で心
 「往かんの心起さずや
 港を後に帆懸けんは

翅を遠く廣ばへつ
 悪夢に迷ふその如、
 立ち添ふ幻影や、愛見等の
 その日暮しの辛き姿、
 乞食となれる妻の姿。
 エノック、神に祈るらく
 「しかく不幸の波間より
 渠等を救ひ賜はりね
 此の身は如何に朽ちんとも、
 時しも、渠が従働ひし

影より尙も淡かりき。
 さはれ想は妻の上へ
 愛兒の空に翅を伸べつ、
 渠等を如何なすべさか
 群り起る後顧想、
 千々の處置に惱みつゝ
 出發るにいと當惑ひにき。
 短艇を賣らんと決めては
 深く愛でたる彼の短艇！

尙ほ數週の間あれば、
 水夫長の位置に當りねと
 進めらるゝに快諾みて
 祈禱の靈驗を喜びぬ。
 渠が不幸の憂き影や
 三
 暫時、小さき雲の葩
 廣き沖邊の空の上へ
 日輪の光、遮りて
 水の面わに島づくる

更さらに想おもひを廻めぐらしぬ
 遠とほくに渡わた航たり己おのが身みは
 商あき業なひし得えじや、此この航た海びは
 一ど度どならでは往ゆかれじや、
 否あらじ、必もと要めの有あらんには
 二た度た、三た度た、幾い度たも。――
 竟つひに幾いく多その富とみを積つみ
 余われ巨おほ船ねの船お長さとなり
 尚なほ利さ益ち豊ゆたかの生な活ぼに

巨おほ濤なみ逆さか巻まく荒あ海うみを
 凌しのぎしことや幾いくそ度た、
 騎き士しの馬うまをば知しれる如ごと
 馴なれにし短た艇ねよ、有あ繫がに。――
 されども賣うりてその代しろに
 種くさ々くさ雑ざつ貨くわを購か求まひて
 商あき業なひせしめんアアンニーに、――
 漁い夫りどもに、その妻つまに
 適よ當さしからん品しな陳か列さり、――
 さらば留る守すさへ安やす樂らかに。――

直ち打明る勇氣は
 彼の目的をアンニに
 さはれ心に決めたる
 溢るゝ情に抱きしめぬ。
 計りつ、いとど慈愛
 手足を撫でつ、身の重
 腕に渡すを抱き取り
 つと寄り添ひて虚弱さ兒を
 アンニ嬉しき聲ながら

若き愛見等教育みて
 樂しき家庭に笑まひつゝ
 平和の月日送らんと。
 四
 しかく心にエノックは
 固く決定めぬ、萬事をば。
 斯くて家路に急ぎつゝ
 色蒼褪めし己が妻
 先日生れの病嬰兒
 抱きて立てるに出會ひたる。

幾多の接吻に話らせて。
 幾多の熱涙、悲しみの
 いと懇ろの願望もて、
 晝夜あらず繰り反へし
 我意を張るに有らねども
 ののしり騒ぐ反對に
 彼の事のみに反對ひぬ。
 争なせし事なきも
 翳せし時ゆ尙ほ未だ

有らずよ渠の胸の中、
 漸らエノック翌日に
 事の由をば語らひき。

其四

出航の卷

事状を聴きたるアンニーは
 曾て夫より送られし
 黄金まがひの指環をば

想へばこそ航海心
 何ど争ひの榮光あらん。
 竟に彼女の願望こそ
 榮光なき水泡！エノックは
 一概に妻の懇願を
 退け去るの苦痛に
 いとど心を悩めしが
 意の儘に貫徹さぬ。

二

(往かば必ず禍事の
 犯さん恐を信ずれば)
 若し妾が身をも愛てまさば
 愛見の上を思しなば
 往かんを止め給ひねと
 固く彼女は祈ぎたりき。
 元より渠は己が爲
 往かんを願ふ航海ならず
 可愛さ深き戀妻の上
 慈愛や熱き愛見の身

いと騒がしく響かせつ
 小さい清らの室の内。
 その物音やアンニの
 耳にはつらく、もの凄く
 響きぬ、その身の架けらるる
 断頭臺を造るべき
 大工の仕事の音の如
 成熟終りを告ぐる迄。

あまりに室の狭ければ

エノック、短艇を賣り拂ひ
 妻の爲にと購求ひし
 種々の雜貨飾列るべき
 柵、角架を街路に
 向へる小さい居間の内
 己自身据へ付けぬ。

出發の朝迫るまで
 日毎終日、槌と斧
 鋸、或るは錐をもて
 大工の仕事の働さに

眠りぬ、明くる朝迄。

三

渠、快活、勇ましく

告別の朝迎へたり。

總て彼女の怖ける

「恐怖」や唯だにアンニの

その身自身の「恐怖」にて

渠には一つの笑ひのみ。

信仰心にいと厚き

渠が巧妙の手によりて

外観よき修繕、齊整しぬ、

恰も「自然」の美はしく

いと周密に花、種子を

包み整ふるその如。

終生アンニ、リ、の爲

働かましと、時の間も

覺悟や深きエノックは

修繕終へて二階なる

夕の床に登りゆき

必^{かなら}ず 崇^{たよと}まき 幸^{さいち}あらん。
 竈^{かまど}を 浄^{きよ}め、 余^わが 爲^{ため}に
 聖^{せい}き 火^ひ 燃^たきて 待^{まち}ちねかし
 和^い女^{にょ}の 知^しらぬ 程^{ほど}にしも
 疾^とくこそ 此^この 身^みは 歸^{かへ}るらめ
 尚^なほも 嬰^う兒^ごの 搖^ゆ籃^{かご}に
 静^{しづ}かに 輕^{かろ}く 觸^さりては。
 「麗^{くは}しく、 小^{ちひ}く、 弱^{よわ}げなる
 かよわき 彼^か兒^れよ—— 否^{いな}しかく

エノック 膝^{ひざ} 屈^まり、 稽^{ねが}首^づきて
 人^{ひと}の 信^{あが}神^がの 心^{こころ}の 靈^{たま}
 神^{かみ}の 惠^{めぐ}み 人^{ひと}の 聖^{せい}旨^{こころ}に
 反^う映^つる 靈^{たま}しき 時^{とき}にしも
 静^{しづ}かに み 祈^{いの}禱^り 捧^たげける。
 渠^かが 身^み 如^い何^かにならんとも
 妻^{つま}子^この 上^{うへ}の 幸^{さいち}の 爲^{ため}。
 終^はりて 語^{かた}りぬ「アンニ—よ
 此^こ度^{たび}の 航^た海^びは 神^{かみ}の 惠^{めぐ}
 余^わ等^らが 上^{うへ}に 注^そがれて

渠が、希望の閃る如く
 語るを聞き安んじても
 望ましげにも想ひしが
 いつしか話移らひて
 天命、或るは天國に
 心定めて信仰めねと。
 荒き水夫の句調にて
 教法ふる如く説き出でて

弱かればこそ余が愛の
 一きは熱く燃ゆるなれ
 神は彼兒をば憐みて
 恵みますらん愛の幸。
 再び歸り來りなば
 彼兒をば己が膝の上
 抱きて、彼地此地の話
 語らひ、渠等を笑ましめん、
 いざアンニよ、余が出發ん
 前に樂しく笑まひねよ。』

暫しばしば時とき經へてア
 ンニ一は
 語かたりぬ『あ
 はれ妾わが夫つまよ
 御おん身みはいと
 も賢さかしきよ
 妾わらはもさこそ
 知しりつれど
 もはや、再また
 び君きみの顔おも
 見まゆる時とき
 や非あらざらん』

五

六

『さらば余われ見みん爾なれの顔おも』

嚴おそ正ただしげに言ことの葉はの
 潮うしほかへりし時ときはしも
 彼かの女むすめは聞きけど心こころの中なか
 小ちひき印しるし象しも止とめざりき。
 譬たとへば田ひ舎やの處ところ女むすめ子こが
 岩い間まに湧わける清しみ水づの下もと
 手て桶かを据すへて、彼かの女むすめの爲ため
 水みづをば汲くみし戀こひ人ひと想おもひ
 溢あふるゝ水みづの音ね聞ききつゝも
 心こころづきせぬ姿さまの如ごとく。

總物を整理へ、保存ねよ
 發つべき時の寄迫たれば。――
 余が爲心を勞さざれ
 憂からば神に爾が配慮
 捧げよ、神の錨こそ
 保護ため。極東に神なきや
 往く處の在すよ、海主宰は
 神にておはす、産みませる』。

八

妻よ、余が船(ひ)を指示し
 通過なん程に爾は彼の
 水夫用ゆる望遠鏡
 透して視めよ、余が顔を、
 さて嘲笑りね、爾が恐怖』。

七

發たんの最後迫る時
 『アンニ、余が妻、氣を直せ
 快樂なれかし、嬰兒等を
 注意りね、此の身の再還る迄、

記憶ゆるべきと臥床の内にて彼兒に接吻したり。
 盡さぬ名残にアンニーは
 嬰兒の額の攀毛を
 剪みて與へつ、それを渠は
 紀念に生涯身に添へき、
 此の時急ぎ包携ち
 別離を告げて出發にけり。

エノックやをら立ち起り
 悄れし妻を抱きては
 驚怪姿の愛兒等に
 接吻しぬ、されど終夜
 發熱に犯され睡眠せて
 疲れ眠れる第三子、
 アンニー靜かに起さんと
 なせるを止め、エノックは
 『そは醒され、眠らせね
 その兒や如何で此の事状を

中 編

其 一

待 佗 の 卷

ア
 ン
 ニ
 ー、
 夫
 の
 指
 示
 せ
 し
 日
 望
 遠
 が
 鏡
 に
 よ
 り
 て
 眺
 め
 か
 し
 が
 効
 驗
 な
 か
 り
 き、
 恐
 ら
 く
 は
 望
 遠
 が
 鏡
 を
 そ
 の
 眼
 に
 適
 は
 す
 べ
 う

漸次に消えゆく帆の影の
 波に隠れて絶ゆる迄
 彼女には視守らひ泣き去りつ。
 嘆きや渠の死せし如
 沈めど、せめて彼の希望
 想ひ浮べて慰みぬ。
 されど彼女は商業に
 榮えや非ず失敗れにき、
 商業風の習ひなく
 狡猾手段に損失の

定め得ざりし爲ならん、
 曇りゐたりし、彼女の眼。
 震へゐたりし、彼女の手、
 アンニ、夫を見るを得ず、
 既に、エノック甲板の上へ
 振りつゝ立ちし其時に
 あはれ其時、その瞬間を
 走りぬ、船は疾く過ぎて。

二

その度毎に、度毎に
 仕入に買ひし價より
 低價く品物賣りければ
 商賣愈失敗れゆき
 知りてはいたく悲しみぬ。
 あはれ來らぬエノックの
 戀しき音信を待ち佗びて
 その身の爲にあさましの
 細き烟を立たせつゝ、
 沈黙や深く、憂鬱の

補ひ勉むる心なく
 虚言言はん惡才あらず。
 或るは掛値に稱へ置き
 後に減くべき術さへも
 なし得ず、常にアンニ、
 『如何にや夫の宣まはん？』
 しかく豫想の群りて
 心を揉みつ、悩ましつ。
 切迫るにつれて困窮の

將^びたそのものを示^{しめ}すべき
 醫^い師^しに拂^はらふ術^{まじ}なくて
 竟^{つひ}にしかくはなりにしか
 | あゝそは兎^とまれ、^{ため}逡巡^{ちんじゆん}の
 少^し時^じが間^まの後^{のち}にしも。――
 彼^{かの}女^{むすめ}の知^しぬ程^{ほど}にしも――
 清^{きよ}く小^{ちひ}さき嬰^を兒^ごの
 あはれ靈^{みたま}魂^{たま}は神^{かみ}の下^へに
 あはたゞしくも飛^とび去^さりぬ
 恰^{あた}も籠^{かご}のそ^の内^{うち}に

日々の生活送りけり。

三

彼^{かの}女^{むすめ}の病^{びやう}身^みの第^{だい}三^{さん}子^し
 母^{はは}が母^{はは}とし養^{やし}育^{いく}に
 注^{ちゆ}意^いもちゐし効^か顯^{けん}もなく
 益^い々^々衰^{おとろ}弱^{じやく}へつ、
 商^{しょう}務^むにほだされ看^み護^ごの
 疎^そかなりし爲^{ため}なるか。
 治^ち療^{りょう}に切^せ要^つなるものなくて

自身心に譴責められ
 慥かに余今アンニを
 見ても可からん、僅かだに
 慰藉を送り能はざると
 窃かに獨私語さつ。
 彼女の家を訪問れて
 正面の方の寂寥の
 室をば通り奥の戸の
 傍に少時止りて
 三度その戸を敲ちしかど

繋がれるたりし鳥の如。

四

その週内に、アンニが
 野邊の埋葬終へし時
 彼女の平和、渴望みつゝ
 心信實なるヒリップは
 (エノック航海に發ちしより
 渠、アンニに會はざれば)
 久しく隔り居たりとて

訥々りつゝ言ひ出でつ
 『アンニよ、余今爰に
 御身に願ふ事由ありて
 煩はしくも訪問れぬ』
 五
 『妾に！しかく悲しくも
 見捨てられにし、捨てられし
 此身にあらはれ願ひとや』
 堪へぬ悲哀の自から
 返す言葉もすげなきに

誰も開けざれば入り込みぬ。
 内には、嬰兒の埋葬ゆ
 新たになされし悲哀の
 胸をし抱き悄坐みて
 人間に面を會はさんも
 うるさしとてよ壁の方
 向ひてアンニ泣き居たる。
 見るより静かにヒリップは
 彼女の傍に進み寄り

彼^かの^エノ^ツク^の願^{ねが}望^{わが}を^ば
 御^{おん}身^みに^かた^らん^をに^こぬ、
 會^あひ^まじ^り、御^{おん}身^みに^かね^と余^{われ}
 二^に人^{たり}の^{うち}内^{うち}ゆ^と最^よ好^き者^{もの}を
 擇^{えら}び^まし^と言^いひ^たり^き。
 心^{こころ}の^ち中^ちに^かた^めた^むれ^ば
 望^{のぞ}め^る事^{こと}の^じ實^{じつ}行^{ぎやう}に
 着^て手^てけ^て必^{かなら}ず^な成^なし^と遂^とぐる
 何^な故^{ごと}し^も渠^かれ^は此^この^か辛^か苦^くき

心^{こころ}お^くれ^つ、ヒ^リッ^プは。
 と^どろ^かし^つ、羞^は心^{こころ}
 は^た愛^め心^{こころ}、胸^{むね}の^ち中^ち
 闘^{たか}は^しめ^つ。誰^{たれ}も^も爾^{しか}
 進^{すす}め^ざり^しを^アン^ニー^の
 傍^{かたはら}近^{ぢか}く^を占^しめ^ぬ
 次^{つぎ}の^{ごと}く^に語^かた^りつ^し。
 六
 「余^{われ}は、御^{おん}身^みの^よ良^よ人^{ひと}に^ます

航海には往きし？爾を残し。

世界を遊歴らん爲とにや

愉快得なんの航海とにや

否じよ、唯だに渠、御身

それにも優る教育をば

愛見等に授けん準備のみ、

此れなん渠が願望なる。

さるを、再び歸國り來て

貴重き曙の時代徒過し

そを見ば、如何に痛嘆くらん、

戯るる野馬の唯だ暴らく

駈けて育ちし子等を見ば

死すとも遺憾や残るらん。

如何にアンニー、

眞心深き舊友の

馴染に隔て有るべきや

御身が良人に、愛見等に

捧ぐる愛情ゆ否よとて

拒げまさを祈望るなり。

共々に

「妾は正面に君の顔
 見るにえ堪へず、己が身や
 さこそ愚かに、あゝさこそ
 寔れはてたる姿なれば。」

あん身が來訪れ給ひたる
 時よ、妾の悲哀は
 いとゞ増しにき、その身今
 誠け信切き言の葉の
 餘る恵や一入に
 心にしみて身にしみて。

御身に所望あるならば
 エノック歸國りて返酬すらん
 御身に所望あるならば
 アンニ一よ 余富みて在り
 男女兒學園に入れしめよ
 余來て願ふ、事由は此れ。」

七
 時に、アンニ一壁の方
 對ひながらに應答へける

許容しますとや？アンニ―よ』
 茲に彼女は向きかへり
 立ちつ。涙を湛へたる
 眼を注ぎぬ、渠の上。
 渠の信切き顔、少時
 視めつ、神の祝福を
 渠に祈ぎつゝ手をとりにて
 感情の極み握り占め
 彼女は小園に、ヒクツプは
 心いそぐ吾家に。

八
 『さらば御身は余が願望
 ヒリップやをら問ひけらく
 信切き心や報酬し得ん』
 あゝ如何なれば此の厚情
 金銭は返濟すを得べけれど
 渠こそ君に返濟すらめ―
 信ぜらるゝよ、何となく―
 さはれ生けりな、エノックは―

其二
情移の卷

後日にて學園にヒリップは
 二人の男女通はしめ
 渠等が用ゆる書籍などを
 買め與へて何事も
 己が子愛づる父の如
 渠等の爲に身を委ぬ。

アンニの爲、此の浦の
 口性悪き評判恐れては
 心盡しの數々を
 それと現に運びかね
 胸に秘めつゝいと稀れに
 彼女の鬪を跨れど。

有繫に見等の便りもて
 野菜、果實、垣の邊の
 早咲き、さては遅咲きの

さはれヒリップ、アンニの
 心の底を知り得ざる、
 訪はれて彼女は今更に
 胸に餘りて限なき
 感謝を陳べん言葉さへ
 浮びかねたる状なれば。
 されどヒリップ、兒童の
 いたく懐ける者なりき、
 渠等は遙か街の角

薔薇を、或るは砂山ゆ
 獲りし野兎、種々に、
 又ある時は心して、
 郊原の上に嘯ける
 高さ櫓の臼場より
 取りて贈りぬ、美しき粉、
 救恤と見ば受る人の
 感情いかにと、出来ばへの
 勝れて宜きを託にて。

寄添纏ひつゝ戯れては
 「ヒリップ阿爺」と渠を呼ぶ、
 ヒリップこそは、エノックの
 忘らるゝにつれ慕はれつ、
 實にやエノック朦朧げよ
 見等には現、夢の如。

まだ曉雲の薄明り
 樹蔭に通ふ徑の端
 指して行方や何處とも
 さだかに見へぬ人の影

渠をし見るや、懇に
 會釋さるゝに心より
 走りて寄るよ、歓迎へんと。

渠等は渠の家、白場
 主人顔に振り舞ひき、
 罪なき悪口、我儘も
 聞き流してぞ逆はぬ
 取煩らはし、身の周圍
 寄添纏ひつゝ戯れつ。

逍遙の卷

其三

ある夕まぐれ見童等
 榛の森に果實拾
 友達打ち連れて遊ばんと
 願ひ出でたることありて
 渠等と共にアンニも
 往かんと想ひ立ちにける。

唯それとのみ、記憶も
 消えて微かにうつろへば。
 既にエノック、渠の家
 生れし國を後にして
 發ちし以來十ヶ年
 年は移らひ過ぎにしを
 渠等の許に一度の
 音信だにも有らずして。

否^{いな}みたりしが兒童^{わらわ}等に
 來^きませと縫^{ぬい}り袖^{そで}袂^{たもと}
 牽^ひかれて笑^{わら}まひを漏^もしける。
 やをらヒリップ^{わら}兒童^{わらわ}等の
 願^{ねが}ふがまゝに領^{うりやう}きつ、
 さるは、渠^か等^らとアンニ^{あんに}の
 一^{ひと}緒^ぢに在^ありたるゆゑかそも、
 竟^{つひ}に皆^{みな}々^々伴^{ばん}れ立ちて
 出^いて行^ゆきにけり、森^{もり}の方^{かた}。

渠^か等^らは「阿^あ爺^やのヒリップ」に
 (慣^なれて渠^か等^らが呼^よべるまゝ)
 同^{おな}じく願^{ねが}ひ、花^{はな}の蔬^{あそ}粉^{こな}の
 中^{うち}に勞^{はたら}く密^{みつ}蜂^ちの如^{ごと}
 白^{しろ}場の粉^{こな}にまみれつゝ、
 白^{しろ}くなれるを見^み出しつ。
 渠^かに向^{むか}ひて言^いひけらく
 「吾^{われ}等^らと共^{とも}に來^きましねや
 阿^あ爺^やヒリップ」と。
 渠^かはしも

互たがひにに叫こゑび、呼よびかはし。
 彼かの方も此この方もをを聲こゑ々々にに
 別わかれ分わかれて森もりの四よ方も
 窪くぼ地みの底そこにに駈かけ降おりつ、
 葉はの榛は樹まの下もと潜ひそり
 さも喧かましく裏うら白しろの
 心こゝろごろろにに歡よろこ喜びを
 共ともに休い息こひぬ。幼こ兒ごは
 叫よびつゝ二人たりに離わかりゆく。

二
 疲つか勞れ覺おぼゆる坂さか路みちの
 半なかばを攀よぢしその時ときに
 窪くぼ地みに森もりの縁よち傾ひな斜め
 飾かりて茂しげれる灌かん木ぼくの
 羽け毛げ生な際はに似にたる所もとにして
 彼かの女むすめは疲つかれぬ、力ちからつき。
 アアンンニニ、「妾わらはを休やすめぬ」と
 吐と息いきながらに言いひ出いでて
 ヒヒリップ承う諾べみ、心こゝろ地ちよく

手負の獸物その如
 爬ひ込みたりし此の蔭の
 悲しき舊時を想ひ出づ。
 竟にヒリップ篤實の
 額を擡げて言ひけらく
 『聴きね、アンニー、森の中
 彼處の下に兒童等の
 いたく樂しむ聲々を』
 彼女の應答あらざらば、

そこらに今を盛時にて
 黄褐色の艶美はしく
 殻連れる房實を
 摘まんと競ひとりつきて
 曲り易くて反ね返へる
 枝を撓め、或るは折りたりき。
 三
 少時ヒリップ、アンニーの
 傍に坐して眼の前
 彼女を忘れつ。
 森の中

御身自身死を招き
渠等を孤兒とは爲しはつる？』
やをらアンニー言ひけらく
妾はそれ等の事どもの
悲想に暮れて居たるには
非ずよ、さはれ——何となく——
渠等の聲の聞ゆれば
もの寂しきよ、胸の中』。

四

「疲れましたか、アンニーよ」
「疲れましたか、」
「應答はなくて、」
顔を埋めぬ。折柄に
ヒリップと面持も
いともの荒く言ひ出てつ。
「彼の船こそは沈せにけれ
彼の船こそは沈せにけれ！
もはや此の上事状
知り得べきやは！如何なれば

時にヒリッブ稍近く
 寄りて語りつ「アンニーよ
 余が此の胸に想あり
 何時起りしか分かねども
 宿るや永し、胸の中
 語らふべきの好機あらん。

オ、アンニーよ、十年なる
 永き月日の以前に
 御身を残せしエノックの
 尙も現世に生存へて

望み得べきの事ならず。
 在んを願ふや鳥済の術

されば……此の身や語らはん、
 貧しく、助くる人もなき
 御身を見るこそ悲しけれ、
 あはれ御身の……非ざれば
 想の儘に助け得て……
 婦人は「直覺」、敏捷しとぞ。
 恐く、御身に直覺るゝを

此の身必ず保証はさん。
 爾信ずるよ、御身若し
 確く此の身の妻たらば
 これ迄總て憂はしき
 年月経しが、尙ほも神
 創造りましたる何れにも
 賜はる丈の幸あるを。
 親族、困難、配慮なく
 そを思されよ、……余富めり――

願へる事や知りません――
 御身を妻になさましと
 實にこそ余は願ふなれ、
 余悦びて兒女等の
 父たるべきを證सानん。
 渠等も此身を父として
 愛づるならめと想ふなる、
 恰も己が自身の
 幼兒をしも愛くしむ
 それかの如く有るべきを

御身、兒童等注意のみ、
まして互に真心の
深き舊友にて、御身をば
知りし以來余戀慕き。

五

時に、アンニ一應答へける
いと柔順に語るらく
君は妾の家内
神の使の如かりき、
夫れ等に就きて吾が神は

幸はへまさん御身をば。

夫れ等に就きて吾が神は
妾より御身を、ヒリップよ
幸よきものもて賞めまさん、
一人が再度愛で得るや？
君を、會てのエノックの
そが如愛づる能ふやは。
何をかしかく願望ふなる？
ヒリップ應答へつ己が身や

妾も一年過ぎゆかば
 事状を判明に知り得らん、
 オ、暫時を！待ちねかし、
 ヒリップ言ひぬ、悲しげに
 『あゝアンニ、よ、従来を
 待ちにし此の身、暫時は—』
 『否とよ、妾は誓ひてき、
 御身履行ませ、妾が誓
 —あはれ一年過ぎゆきて、

エノックよりは劣るとも
 愛でられ得なば満足つ、
 アンニ、恰も被怖れし
 それかの如く叫ぶらく。
 『オ、親愛はしのヒリップよ
 少時を待ちね、エノックの
 歸らば—さはれエノックや
 歸り来まじよ—一年を
 待ちて給ひね、一年は
 さこそ永くも非ざれば。

森をもり通とほして見み童わらわ等らを
 渠かは呼よばはり招まねきたる、
 幼こ兒ご等らは獲と物をものば
 背せ負おひて登のぼり來きたりけり、
 ささてししも一ひと同どう諸しよ共ごに
 港みなとの方かたに下くだりゆゆきぬ。
 其その處ところ、アアンンニニトトの戸いり口ぐちに
 渠かは止とどまり手てを把とりて
 静しずかに言いへらく「アアンンニニーーよ

茲こゝに兩ふた人りは沈も黙だせしが
 竟つひにヒヒリップ、仰あ視みぎつゝ、
 ダダニニシシユユ永ね眠むれる墳はかの上うへ、
 過すぐる入いり日ひの死しの影かげ
 認みめて立たちぬ、夜よと寒さむさ
 彼かの女ぢよの爲ために恐おそれつゝ。
 六

妾わが如ごと御おん身みも一ひと年とせを
 堪たへね」と彼かの女ぢよ叫さけびたり、
 ヒヒリップ、應い答ちへつ「忍しのばまし」。

其四
再婚の巻

瞬間に過ぎし如く
未だアンニ、家事を
扱ふ程に、「御身をば
知りし以來戀慕るし」と
語りし渠の終結の語
尚ほ耳去らぬ時にしも。

御身に己が語りたる
先刻こそ和女が身の
疲れておはせる時なりし。
余悪しかりき、己が身や
常におん身と誓へれど
自由にておはせ、み心の』
時にアンニ涙をば
湛へながらに應答いける
「妾は誓を爲したるよ」。

果實再び熟すれば、
 いでや出て来て見給ひね、
 されどもあはれアンニーは。――

渠の言葉を黜けぬ――
 注意ふべき事多ければ……
 斯る變化よ……一月を……
 唯だ一月を猶豫てよ……
 妾は自覺れり、履行べきを――
 一月経なば……上言はじ。

秋は飛びゆき移らひて
 再び空や秋景色、
 折しも渠はアンニーの
 許を訪づれ來り寄り
 彼女の誓履行べきを
 請求めて再び立ちにける。

アンニー尋ひぬ「あゝ早も
 一年竟に過ぎにしか」、
 渠應答ふらく「さなり、彼の

怒り罵り殆めたれ。
 關りたりし事件の如
 その身の上の損害に
 推量りしに違ひしを
 口性惡の人口は
 斯ればこそよ、此の浦の

二

試みながら、彼の
 言ひ譯しつゝ、延期しめき。

時によ、ヒリップ、終生の
 「飢餓」に満ちたる眼にて
 醉漢の手のその如
 儚く震へる聲にて
 「御身の自由に延期せかし
 自由に延期しね、アンニーよ。」

アンニー、渠の同情に
 感泣きたるならん、されど尙
 年はや半ば過ぎる迄
 渠の信實心、長忍堪心

ヒリップをも亦彼女をも
 嘲笑りにけれ、共々に。
 彼女の男の兒は言はざれど
 沈黙の中に己が身の
 希望を屢々現はしつ、
 娘は常に己等に
 親密しき人と縁結び
 救へと逼りぬ、家庭の貧。

ましてヒリップ薔薇色の

甲なる人はヒリップが
 唯だ彼女をば徒に
 弄びしと想ひける、
 また乙なるはアンニーが
 渠を寄せんの心にて
 しかく避くると想ひにき。

尚ほ他の者は口々に
 渠等兩人ぞ己が身の
 心も知らぬ淺ましき
 人よとこそは罵りて

文目もわかぬ闇の中
 堪へず、恐怖の心待。
 彼女は寢床を起き出で、
 自身燈火擦りつけつ、
 怖ぢつ、聖書を攫り上げて
 表示、得んとゆくりなく
 開き、指もて突きたりき
 「棕櫚の下に」の經句の上。
 そはアンニーに効験なく

顔には寄する皺の波、
 窶れ、肉落ち、氣力さへ
 衰へゆきて蒼褪めつ、
 此等は、彼女の胸の中
 いとも鋭く譴責にける。

三

竟に或る夕事ありき、
 アンニー睡眠、得ざりしが
 「妾が夫は逝きしか」と
 熱心に表示、祈りつゝ、

あゝ、^か耀^やけり、
渠^かの上^う。

幸^{さい}よき人々、
前^{まへ}に後^{あと}

競^きひ寄^よりつゝ、
従^{したが}ひて

「至上^{たか}處^{ところ}に
ホザナよ！」と

叫^こ謳^えびし時^{とき}の
棕^{しゆ}欄^{らん}ならん、

茲^{こゝ}にア
ンニ一^{いつ}夢^{ゆめ}
醒^さめて

深^{ふか}く心^{こゝろ}に
決^さ定^ためたり。

招^まきて荒^あく
ヒリップに

「妾^{わらわ}等^らいか
で結^{むす}婚^{こん}をば

願^{ねが}ひの意^い味^{あじ}有^あらずとて

聖^{みよ}書を閉^とぢて眠^{ねむ}りたり、

「看^みよ、
エノックや丘^{かみ}の上^{うへ}」

一^{ひとつ}本^{ほん}「棕^{しゆ}欄^{らん}の
下^{した}に」坐^まし

日^ひ輪^{りん}照^てせり、
渠^かの上^{うへ}」。

彼^{かの}女^{ぢよ}心^{こゝろ}に
想^{おも}へらく

「あはれエノック
逝^ゆきけりな

渠^かこそ幸^{さい}福^{ふく}、
天^{てん}國^{こく}に

讚^た美^へのみ歌^{うた}、
謳^{うた}唱^なへるよ

救^{すく}世^せの主^{ぬし}の
み光^{ひかり}は

なさぬべきやは。ヒリップは
 應答へぬ『さらば神の爲
 余等の爲に御身と余
 縁を結ぶ、急がまし』。

註*幸よき人々……叫謳びし時の棕櫚ならん」とは、
 Bible, Mark, 11:8-10に有る「人々……樹の枝を伐り
 て路上に布き、かつ前にゆき後に従ふ人々呼
 ばり日ひけるは、ホザナよ主の名によりて
 來る者は福なり、主の名によりて來る我儕の
 父なるダビデの國は福なり、至上處にホザナ
 よ」と有るをとれるなり、見ん人の良解し易き
 を希ひ、いさゝか拙筆を加へつ。

四

斯くて渠等は縁結び
 鐘は樂しく響きたり、
 樂しく鐘は鳴り響き
 渠等は縁を結びたり、
 さはれ彼女の心臓や
 嬉しとだにも鼓動ざりき。

彼女は、通ふ道の邊に
 琵琶音寄すると想はれつ
 何處よりとも明かずして、

ヒリップ既に理由
 想ひめぐらし覺りける、
 妊娠める身にしてアンニの
 年齢の如くうら若き
 女子や普通、疑惑、はた
 恐怖を懐くものなるを。
 されどアンニ一幼兒の
 産れ出でたるその時ゆ
 新の愛見に自身を
 新たになされし如くにて

叫く聲の耳の邊に
 響けど理由を知らざりき、
 されば忌しよ、留守居をば。
 あるは孤身、家の外
 冒險して出づるを避けたりし、
 彼女や如何で斯くばかり
 苦しむなるか、家の内
 入らんとしては恐れつゝ
 躊躇ひ手がけぬ、鏝に。

後 編

其 一

孤 島 の 卷

エノック 何處に居たりしか
 「好運號」は安全に
 帆掛けて疾く走りしを、
 ビスケイ灣の波濤暴れて

彼女の胸には湧き出でぬ
 新の母よの嬌心

斯れば竟にアンニの
 いたはしの夫ヒリップは
 彼女の胸に限りなき
 いとしの君となりたりし、
 あはれ靈しき本性
 彼女に全く消滅はてて。

絶えず静かに吹き来り
 金色映よき島々に
 沿ひつゝ進航り、東洋の
 港の内、に静泊ふ迄
 樂しく船は送られぬ。

=

其處にてエノック、己が爲
 商業なしつ、當時の
 市場に賣らんといと巧妙に
 製作りあげたる彫刻品、

沈没まんばかり動揺しかど。
 東方に逆巻き船を擲ち
 船は赤道直下をも
 進航辛くも横過りて
 喜望の岬の周邊なる
 永き跌倒、晴れ曇り
 空頻變を後に再
 進航りぬ、赤道直下の邊。
 彼れを通過れば天の風

斯くて静けき洋の面
 暫は風の續きしが
 變化常なき風起り
 その後逆風うち續き
 竟には船を海の底
 藻屑と逐ひし大暴風。

折から「碎波」の絶叫の音
 起りし刹那、もの凄き
 破裂の碎響、もろ共に
 エノック其他唯二人

龍見の爲に渡金の
 細工など購求ひつ。

歸航は災ひ多かりき、
 初めの日々や浪静か
 幾多の麗しき海の岸
 過ぎつゝ、船首の破浪神
 舳に泡立つ漣の
 光景を眺めて進みける。

三

孤島には豊か、人間の食料
 大穀、胡桃、滋養の
 菜根、柔らかな果實など、
 可憐心なくば、暴けれど
 やさしく馴るゝ野生の
 獣や獲るに難からず。

海に向へる山の峽
 其處に住居の一棟を
 渠等は造りぬ、草の庵、
 梭欄の葉をもて屋根を葺き

残りしのみよ、何物も
 あゝ残りなく失せはてぬ。

三人は共に夜半の空
 漂ふ船具、裂かれたる
 圓材の上、浮びつゝ
 朝、漂着けり、寂寥の
 洋の沖邊の豊饒にて
 いとど寂しき孤島の上。

四

そは年未だ少年の
 いと幼き一人しも
 突然に起りし破船の夜
 傷つけられて三年をば
 九死の病床に悩めるを
 渠等棄つるに忍びずて。
 その後病者逝き、残りたる
 二人は倒れし一本の
 幹を得たるが、エノックの
 友は己が身注意せず

半ばは草屋、片側の
 半ばは自然の洞の穴。
 しかく三人は何事の
 不足も有らず豊裕なる
 此等エデンの園の中
 その身を置かれ、絶えまなき
 常夏としも諸共に
 想や満たぬ住居しぬ。

五

峰嶺まで生樹の繁茂き山、
 樹間の芝生、天通ふ
 路かの如にいや高く
 紆曲れる林路、椰子の樹の
 細き垂下の羽の冠、
 蟲、はた鳥の閃飛を。

榮光立派しき樹幹の邊に
 纏へる、或るは陸の果
 水際までも匍匐へる
 蔓いと長さ草の光澤、

熱に觸れてぞ病死しぬ。
 印度式に焼き穿りし
 後に残りしエノックは
 孤身淋しく孤島の上に
 生活しつゝ、逝きたりし
 渠等二人の死によりて
 神の黙誠、覺りける
 時たらんを「待てよ」との。

船を待ちつゝ、飛び施回る
 無数の海鳥の叫び聲、
 暗礁に逆巻く長波の音、
 天頂に枝生ひ花咲ける
 巨木の風に吼ゆる聲。
 海に漑けるいと急き
 小川の掃流の音を聞きぬ、
 されども日々船見えぬ、
 日毎に棕櫚、羊齒、崖の峽
 洩れて彩る濃き紅の

暑氣さびしき赤道の
 熾焰、壯麗をも渠は見つ。
 さはれ、喜び見まほしと
 願ふ親しき人間の顔
 願ふ懐しき人間の聲
 見得ず、聴きえず唯渠は
 磯に徜徉ひ、終日を
 海に向へる峽に坐し。
 破船の水夫の儚き身

其處にて屢々渠の上
 金色蜥蜴留まる迄
 静かに凝視をまもりつゝ
 種々の幻像あつまれる
 幻影現はれ眼のあたり

七

再び色濃き紅の
 日出の金矢、映ゆれども
 近き沖邊を通ひゆく
 あはれ船こそなかりけれ。

金矢映光よき旭出。

朝、東方、汐の上
 耀やく日光。真晝時
 渠の島の上、輝る日光。
 夕、西方、汐の上
 燦めく日光。夕ざれば
 天に球なす、大の星。
 一層凄く吼ゆる大洋、
 しかく移りて時さりて

立ち添ふ光景を認めにき。

あるは、自身赤道の

遙か彼方のいと暗き

島邊の親しき人と物、

土地、嬰兒等、喃の聲、

アソニー、小き己が家、

横這へる街、磨舎。

草葉繁れる徑、あるは

孔雀形なす櫟の樹、

静閑しき屋敷、乗り馴れし

馬、はた賣りたる彼の短艇、

十一月寒き曙の空、

露帯び暗き丘の姿。

静けき村雨、枯葉の香、

銀彩なす海の波

微かに叫ぶ聲などの

耳に、眼に立ち添ひて

惱ましげにぞ動くをば

渠は夢想に認めにき。

八

また或る時は、渠の耳
鳴りつゝあればその音や
微かなれども樂しげに

——いとも遙けき彼方なる——

渠は聽きたり、故國の
寺院にて響く鐘の聲。

折からエノック、何故か
理由わかねど突爾に

身震しつゝ起ち上り
しか艶麗しく、思まはしき
孤島なる己が身の上に
想ひかへりしあゝ時よ。

渠や、儂き心の中

「神は何方、何處にも

在して、信仰むる人々に

唯だ獨身と佗びしめぬ」

譯を信じてあらんには
必ず死しけん、寂寥ゆ。

渠が、妻子に見えなん
 馴れにし聖き彼の野邊を
 逍遙まん願望、尙ほ未だ
 絶えざる程に、突然
 渠の寂しき悲しみの
 非運の最後、來りける。

或る他の船が(水得んと)
 進航ゆくべき航路より
 「好運」號のそれの如

歸航の卷 其二

斯くてよあはれ、さる程に
 渠エノックの早白髪
 生ふる頭上に晴朗の
 あるは多雨の季期は
 年々廻りて來つ往きつ
 幾多の年の移りけり。

渠等は船より一群の
 水夫を送りつ。一群は
 陸に上りて散亂に
 流を、或るは泉をば
 探求め廻りて騒がしき
 器聲に満たしぬ、磯の上。

二

長き髪、長き鬚生ふる
 孤獨者の山の峽
 降りて下方に歩み來つ、

暴風に吹かれ、漂泊へる
 此處いづことも知らずして
 此の狐島近く寄せられき。

そは、ほのくくと曙の空
 海霧かこめる孤島の上
 霧の絶え間を横ぎりて
 彼方の丘ゆ滑かに
 無聲の清水流るるを
 副船長の認たればよ。

さて水夫等に雜入はりて
 互に語らふ言の葉を
 聽けるに從れて、久しくも
 用ゐてありし渠の舌
 漸く、渠等に話をば
 通ずるまでに馴れにける。

水桶満たし水夫等は
 渠を伴れたり、船の中、
 渠は、切々語りたる
 奇談を最初疑ひて

皮膚褐色に、身の姿
 人間とも見えず、いと怪しき
 服装や恰も癡鈍然。

明晰ならぬ熱望もて
 謔き、眩き、水夫等の
 誰しも知らぬ手號をす、
 渠は水夫等を導きて
 麗涼しき清水のさゝ流れ
 流るゝ岸に伴ゆきぬ。

渠かれがうまれし家郷やとの
 人ひとしもあらず、まして尙なほ
 尋たづねつ問とはれつエノックの
 知しらんと願ねがふ一事ことも
 答こたふる者ものだに在ありき。

三

航た海びは永ながく遅おそ滞こり
 進た航たや鈍鈍くその船ねは
 航た海びに半なば適あはざりし、
 されども渠かれの想さう像さうの

漸し次たに信し聽んぜし人々ひとを
 驚おどかしめつ、和やわげぬ。

渠かれ等らは渠かれに衣いを與あたへ
 渡わ航たすの賃し金ろをも免ゆる除ぞしたり、
 されど屢しば々くエノックは
 その他たの水夫すゐの内うちに入り
 自みづか身ら共ともに働はたらきて
 唯ただ獨ひとり居りを棄すてにける。

此これ等ら多おほくの人の内うち

翹は緩き風の前
翹けつ歸りつ飛ぶまがふ。

竟に、雲蔽ふ月の下

熱情に燃ゆる戀慕者

そが如臥し居て吸ひにけり

幽靈然の崖を横りつゝ

微吹き寄する英國の

露帯ぶ牧場の朝の風。

その朝、役員水夫等は

孤獨の身をば憐みて
惠の金を募り醸せ
渠に送りて海の岸
近づき、揚げぬ、過ぐる年
渠が出帆にし港の上。

其三

家郷の卷

陸に上りてエノックは

前路長路の見え暗し。

左右にしぼめる森と圃

あるは牧場や朦朧にて

枯葉散りにし裸々の樹に

鳴くよ、知更鳥、悲哀の音、

垂れ込められし霧の間

落葉寂しく散りまがふ。

海霧いよゝ濃く染めて

闇の幕はいや深く

語らず、言はず、黙しつゝ

その身の家に——己が家に——

如何になりけん己が家に——

はた尙ほいまに残るらん——

急ぎ歩みぬ、己が家に。

西に傾く日の光

輝き照りしが冷けく

浦に、湊に、海霧の

翅擴がり、灰色に

下界は漸次に蔽はれて

迎りて着きぬ、已が家。
 互に愛でつ愛でられつ
 三人の愛しき嬰兒等の
 呱呱の音叫び、榮光翳し
 いやゝ幸よき七年を
 平和の夢に送りたる
 吾が家にあはれエノックは。
 さはれ燈灯、影見えぬ
 謐聲だに有らず、(霧の間)

竟に、深霧立ち込めて
 蔽ひ圍める街の灯の
 燦めく影を認めしが
 渠は到りぬ、灯の處に。
 長く連る街の中
 竊かに忍びて歩みつゝ
 渠の胸には災禍の
 幾多の影の浮び出で
 舗石に眺めを注ぎつゝ
 二

孤身寂しく下りける。

さこそ柱に支へられ
虫食み、壊れ、古びたる
彼の家よ、もはや跡もなく
滅びしならめと想ひしが
さはれその家の主人のみ
此の世の人にあらざりき。

曾ては繁々に水夫等の
出入をなして騒がしき

透して見れば、賣家札！
「永切の眠に落ちにしか
此の身の見より失せしか！」と
黙考して下方に渠出でぬ。

往時ゆ渠が覺えたる
古風に十文字の木
正面に控へし客舎
尋ねつ求めつ、港の邊
狭き埠頭のあたりまで

三

されど、ミリヤムレンはしも
 心優しく、言葉數
 多き性とてエノックに
 沈黙さしむるの時もなし、
 屢々渠の室の中
 伺ひ入りて語りつゝ。
 腰さへ屈り憔悴たれば――
 しかく皮膚や褐色に

此の家なりしを、寡婦とぞ
 ミリヤムレンの残されて
 家産の利益日々くくに
 減りゆき失せて侘び住居。
 あはれ今はも家寂びつ、
 尙ほも旅ゆく人々に
 一夜を借せて居たりける、
 此の家の内にエノックは
 沈黙して静かに數日を
 休息ふ事とはなしたりき。

されども渠の容貌に
 現はれざりき、心の影、
 はた様子かはらず。居合ひなば
 誰しも、語れる者程も
 渠に感動のなかりしと
 想ふも宜のことならん。

『可憐の女よ、エノックは
 斯くと彼女の語り來て
 船しも破れ溺死れしよ』

ミリヤム渠をエノックと
 知らずて、浦の他の歴史と
 共に語りぬ、エノックの
 家庭の總ての始末を。

妻の貧窮、嬰兒の死、
 ヒリップ兒女を學園に
 通はせ、保助け、久しくも
 愛をば求め、アンニ一の
 鈍き承諾、結婚、
 嬰兒産れし事などを。

さはれエノック今一度
 彼のアンニーの容貌を
 見ましがばとぞ祈りける、
 『一度なりと、あゝ此の身
 彼女の愛しき顔の姿
 眺めて彼女の幸知らば』
 此の祈願こそ渠をして
 煩悶えしめけれ、惱ましぬ、
 もの皆陰鬱む霜月の

五

此の一言を終りにて
 竟に話の終へし時
 エノック心に感みし如。
 白髪となれる頭をば
 打ち振りながら幾度か
 『船しも破れ溺死れしよ』
 しか呟きを繰りかへし
 再び深く内心にて
 謚ぎたりき『溺死れしよ！』

渠かねの心こころや誘まそはれつ、
 譬たとへば夕ゆふ、渡わたり鳥とり
 標とも燈しの光ひかり、認みだして
 もの狂くるはしくゆくりなく
 飛とびゆき、儂ぼかなく突つき當あたり
 疲つかれし運命さため捨すつる如ごと。
 六
 渠かね等らの家いえは街まちに向むかひ
 砂すな山やまの方かたへ街まちはづれ、
 背う面らには、郊原こほらに擴ひろがる

寂寥さび、沈黙しんもくす夕ゆふまぐれ
 渠かねは出いでゆき丘かみの上うへ
 下した方を凝視ねんしめて坐まを占しめつ。
 辭ことばに絶たえし悲哀かなしみの
 無む限げんの追想おぼ、湧わきかへり、
 遙はか彼方かなたのヒリップの
 家いえの背う面らより樂たのしげに
 光ひかり燦きらめく方かた形の灯ひ
 漸し次に現あらはれ眼めに映はえぬ。
 漸し次に現あらはれ眼めに映はえぬ。

若しエノックの胸の中
 極度に登れる悲哀の
 減りゆき或るは増り來る
 差別ありなば如何ばかり
 眺めてありなん光景を
 あはれ渠こそ見たる哉
 七
 光澤美はしき卓の上
 鍾、銀匙、燦めきて
 爐の光景さへ樂しげよ、

狭き形に圍む垣の内
 園内に一本古生の樹
 立つよ、常盤の櫟の樹
 周圍は去れる小石路
 通路園を分ちたり、
 中央の道をエノックは
 避けて樹蔭に佇みぬ。

彼女は繼父の肩の上
 俯向き寄りて、愛し嬰兒
 戯誘る爲の絹紐と輪
 垂るれば、嬰兒や襞襜ある
 肉よき手をばさし揚げて
 攫らんとしては誤りつ。

あどけなくこそ睦るゝを
 眺むる家族は諸共に
 笑ひ叫めさ興じあふ、
 爐の左手に座を占むる

あはれ、彼の時アンニーに
 戀慕ひて失敗れしヒリップを
 渠は認めぬ、爐の右傍に。

いと壯健かに、紅の顔
 嬰兒を斜に膝の上
 抱ける渠を、ヒリップを！
 髪美はしく、脊や高さ
 一人の少女、母よりも
 脊高く、美しきアンニーリ！

「死」より再び現はれし
 渠は、今はた妻ならぬ
 己が妻をば見つ、あるは
 己が見ならぬ、アンニ一の
 嬰兒や父の膝の上に
 笑まへる姿を眺めたる。

あるは總ての暖睦
 平和、幸福、脊や高く
 麗しき己が兒童等を、
 渠に代りて支配へる

母は屢々己が兒の
 嬰兒の方を顧みつ。

あるは彼女の傍に
 立てる脊高く壯健かの
 己が男童の方に向き
 何をか語り、渠をして
 優しき微笑、榮えしむる
 光景をもエノック認めにき。

八

絶叫の聲ゆ破れんを
 恐れき、あはれ絶叫びなば
 *神判の喇叭、響く如
 瞬く間に、爐邊の幸
 裂きゆくべきを恐れつし。

註*「神判の喇叭」と譯せしが原詩には“the blast of doom”
 と有りて「審判の喇叭」なるを、殊に見易からんを
 願ふ心より審判を神とはなしつ、さて聖書に「此世
 の終に人類皆神の前に審判を受く」とあり、即ち
 此の喇叭は其開廷を告ぐるもの凄き響なり、さ
 れば爰に用ゐし意味も自ら明かならん詳しく
 は Bible. Cor. 15:52. を照合して知るべし。

権利、兒童の愛の主
 他人の渠を見たる時。――
 聽けるは目撃に及かずとや
 曩にミリヤム悉く
 語るを聽きしエノックや
 轉倒れんばかり足たわわ
 断裂れんばかり肉ふるひ
 辛く樹の枝に保たれぬ。
 窺かに、鋭く恐ろしき

神に祈禱を捧げしよ。
 指に、濕れる土を穿り
 大地に倒れ、打ち伏して
 祈りしならめど支へかね
 弱からざりせば跪き
 渠の膝しも尙ほしかく
 十
 室の扉に觸る如く
 静かに閉ぢて郊原に出づ。

九
 さればエノック足の下
 粗き小石の相磨ふを
 恐れ、恰も盜賊の
 それかの如く窃やかに
 足音忍びて向き返り
 眩暈しつ、轉倒れたり。
 人目を避けて、いと辛く
 花園の垣根を添ひづたひ
 門まで潜行り扉を開き

救助すけ給ひね、
 犯さぬ余とならしめよ
 彼女の安樂しき平和を
 心の力を賜はりね、
 必ず告げず、知らしめぬ
 彼女に語らず、彼の妻に
 救支へ給ひね、
 救支へ給ひね、あゝ余を
 その中にしも此身をば
 オ、今暫時！寂寥の
 救助すけ給ひね、
 天父の神！

救支へ給ひし天の神
 余を寂しき島の上へ
 幸はひ崇き救ひ主。
 オ、全能の天の神
 伴れ歸りしぞ、如何なれば？
 孤島より余を此處にしも
 何どかく、渠等は人もなき
 「堪ゆるに難き想ひ哉！
 十一

氣絶く、エノックは
 伏して在りしが起ち上り
 再び、寂しき宿の方
 歩み進むる歸り路。
 彼のいと長く幅狭き
 街の中をば歩みつゝ
 唱歌の反覆の句の如く
 疲かれし脳髓に響かせつ
 『彼女に語らず、彼の妻に
 必ず告げず、知らしめぬ』。

余が愛見にも、あはれ亦！
 語られじとや、此の由を、
 渠等は知らじ、此の父を、
 語らじ、言はじ、想ふまじ、
 余にはあらず、父の接吻
 ……母似の娘に、男の悴にも……』。

十二

言葉、思考も本性も
 斯くて少時は絶えだえに

ミリヤムレンに渠向ひ
 「御身が語りし磨者の
 妻は、最初の彼の良人
 生存ふべきかを想ふなる
 心に畏懼を懐けりや？」
 しかく静かに問ひ出てつ。
 『さなり、可憐の人なるよ
 畏懼に満てり！御身若し
 渠の死せしを見たる由』

其四
臨終の巻

もの皆不幸の渠ならず
 確固なき信仰に、海の底
 清水の源泉湧くが如く
 意志の活源、流れ来る
 憂世に苦戦ふ禱祈に、
 決意に、保たれぬ。

如何なる事をもエノックの
 成し得ぬものやなかりける、
 桶をも造り、大工さへ
 成し得る渠よ、船子等に
 漁網を賣らましと
 そをば作るに働きつ。
 であるは、當時微かなる
 通商せんと入り来る
 脊高き船に雇はれて

二

語りましなば如何ばかり
 安息の胸に和がらん
 ミリヤムしかく應答へける。
 渠は想ひぬ『死の神の
 招きに、逝かん後に社
 彼女や知らぬ、その時を
 余待なん』と。救恤を
 忌めるエノック自身に
 労働求めつ、生活の。

年は廻りて、去年にしも
 歸國り來し日に當れる日
 漸次に人を衰弱に
 送る病は渠の上
 はしなく落ちて、あゝもはや
 なし得ずなりぬ、労働を。

唯だにエノック、家屋の内
 さまよひ、或るは椅子の上
 継り居たるが後、病床の中。

荷積をなしつ、荷卸を
 なしつゝ斯る労働にて
 貧しき生活送りけり。

さはれ、そは唯だ己が身の
 生活せんの労働にて
 希望の影を懐きつゝ
 樂しく送るに非ざれば
 妻子養ふ男子の如
 榮光やは有らん、經營に。

聖書によりて誓ひたり。
折からエノック、彼女の上へ
灰色眼を注ぎつゝ、
語りぬ『御身は此の街の
エノックアーデン知りますや？』
『知り、妾は遠視にも
見分くる迄もエノックを
さなり、妾は此の街を
下来る渠を見るが如
思ひ浮ぶよ、高慢りて

絶えざる前に『洩さじ』と
聖書によりて誓ひねよ。
優しき婦人は叫びたり
『死すとや？君よ、妄語を
な言ひましそ！誓ひても
妾は癒やさんと願ふなれ』
エノック再言ねぬ、嚴格に
『聖書によりて誓ひねよ』
ミリヤム、半ば驚きつ

人を「心」に置かざりし。

渠は静かに、悲しげに

婦人に「應答」へつ「渠や今

高慢」なさず、一人だに

注意する者もなし……

此の身の運命、もはや三日

保たじ……あゝ余エノックよ。

婦人は半ば信ぜざる
半ば瘡癩おこす如

叫びぬ「御身アーデンと？」

御身が！否とよ——渠は尙

確かに御身の夫れよりも

脊高かりしよ、一「呎」。

エノック再び言ひけらく

「余が神、此の身を現在の如

屈め給ひき、悲哀と

寂寥こそは傷めたれ、

さはれ、此の身やアンニと

縁結びし者なるを。

或るは夫れをば如何にして
 守りしなどの事状の由
 いと詳しく胸の中。
 脆き涙を流しけり、
 その間もミリヤム心の中
 渠、はた渠の辛慘を
 湊の周囲駈け廻り
 告るゝを絶えず欲しける。

君よ知りませ、あゝ余は、
 | その名は再度變りしが |
 ヒリップレーと家庭をば
 作れる彼女と結婚びしよ、
 暫時坐して聴きましね』
 それより渠は語りける。
 航海、難船、寂棲
 歸國りし由來、アンニーを
 窃視せしこと、決心

此身を看視りて會得りませ。
 語る力の有る程は
 再び坐しね、尙余に
 死すまで目的守らしね、
 此身を迷はし給ひぞよ
 『臨終の際にあはれ君』

四

起ち上らんとしたる時
 やをら應答へぬ次の如。

されど誓に縛されて
 心に恐るゝミリヤムは
 『死の前！御身の愛見等』
 一目見ましね、妾は此處に
 迎へて來なん、アーデンよ』
 言ひつゝ傍に控へたり。
 エノック少時、應答ふべき
 言葉に躊躇ひ、黙考すれば
 ミリヤムいよゝ、唆かし
 伴れて來べきを急ぎつゝ

爾の祝福に、み祈禱に
用ゐられしと語りねよ。

尚ほ余が悴には「祝福へつゝ
死したる由」を、ヒリップに
「祝福へし事」を傳へねよ、
渠は余等に善き事の
外には想あらずして
唯だ知らざりき、生ける余を。

余が愛見等の、死せる身を

さては御身に託しなん
彼女に會ひなば「爾を神に
祝福へつ祈ぎつ愛しみ
余等の間に隔て者
無りしならば、枕をば
並べし時の如かるを……。

愛てつゝ死せしと告げましね、
また、彼の母に好く似しと
見たる娘のアンニーに
「此身の臨終の呼吸は

肌離さず保存ちにき。

此は、瑩域に到るまで
身體に添へて保存たんと
想ひゐたりし、さはれ今
己が心ぞ移りける、
神の天國の嬰兒をば
此身は見るを得べければ。

さればよ、永劫の睡眠にと
逝きたるあした持ち往きて

見なんと請はよ來さしめね
此身、渠等のあゝ父よ、
さはれ、彼女を來さしめぞ
死したる顔やアンニーを
惱ますべければ、晩年まで。

あはれ此身の血統にて
「來世」の園に抱くべき
者は一人よ、此の鬢毛や
渠のものなり——アンニーの
剪みて興へき——年頃を

彼女も再び誓ひけり。

六

さて後、三日目のその夕
 エノック動かさず、蒼褪めて
 眠りつ、看護る彼女もそと
 微睡む時よ、浦の家
 共に響る如、聲高く
 轟き寄せぬ、濤の音。
 エノック醒め、立ち上り

與へ給ひね、アンニーに、
 彼女の慰籍となり得べく
 まして余が身のエノックを
 證す記號となるならん。

五

話は終へつ。ミリヤムの
 總て誓ひにいと輕卒く
 諾答へにければエノックは
 再び、彼女を眺めつゝ、
 屢々願望を繰り反し

曾て見しこと無かりしと
しか盛大しき埋葬式

《をばり》

「帆影！ 帆影！ 己が身は
救はれたりとぞいと太さ
聲にて叫び、己が腕
擴げ差し出し、打ち倒れ
語らざりけり、あゝ最早。

七

斯く、いと猛く、鬼神をも
凌がんの靈魂、消え失せつ。
送葬りし時に浦人は
此のいと小さき湊にて

詩歌の神の慈愛か
 自然の神の聖靈か。
 互に戀ひつ戀はれつゝ
 縁の神に結ばれて
 平和の家庭に笑まひしも
 唯だ七年よ、春の夢。
 益荒猛男と人々の
 稱讚の詩に榮えし日の
 君が希望や高かりし

エノックに

嫉妬、怨恨にともすれば
 狂ひがちな人の世に
 永劫に眞澄の瓊の色
 聖きは君が心かな。
 戀愛に聖き君の愛
 同情に熱き君の胸

「自然」の幸の木實はみ
 辛く生命を保ちつゝ
 故國空の妻、愛兒
 忍びし君が感如何。

想の翅ひろばへて
 日毎に彷徨ふ磯の上
 いかに眺めし故國の
 海に續ける洋の汐。

君が理想や永かりし。

さるを不遇の波寄せて
 妻子を外に十二年
 旅寢の床に消失せて
 今はた跡なき夢の影。

遠き航海に旅立ちて
 悪魔の翼風に船破れ
 人なき孤島に濡告天子
 帆影望みし君が身や。

寄航る船に救はれて
 歸れば最愛のアンニーや
 今は儚く友の妻。

一夜ヒリップの窓の内
 爐邊の團欒眺めては
 なが眼を射りし妻の笑
 愛見の頬やいかなりし。

さはれ静かに跪き
 神に捧げし汝が祈り！

想の翅おとろへて
 夜毎に打臥す床の上
 いかに眺めし故國の
 空に連なる天の河。

如何や聞きし浪の詩
 如何や覺えし風の聲
 如何や仰ぎし星の姿
 如何や望みし月の貌。

君には神の使者と

臨終の床に宿主婦召し
渠に送りし汝が辭!

詩歌の神の慈愛か
自然の神の聖靈か
戀愛に聖き君の愛!
同情に熱き君の胸!

燃ゆる焔も「可憐」の
あゝ犠牲と捧げたる
寛大く崇く聖らけき

あはれおん身の胸の香よ。

煩悶、悲哀、憂き波の

荒き下界の洋の面
雲の光景にも怖かれ
辿りや辛き人生よ。

明日の「我」を知らぬ世の
別離はいづれ死の門出
見送る人の袖の上

何^などか妻^{つま}子^こを^を残^{のこ}したる？
 「往^ゆかば必^{かなら}ず禍^{わざはひ}事^{こと}の
 犯^{おか}さん怨^{おとし}を信^{しん}じ」つゝ
 祈^ねぎし言^{こと}葉^はを諾^{うべ}まで。
 さはれ「貯^{たくは}蓄^{あつ}集^{あつ}め來^きて
 己^{おの}が夫^よ婦^たに優^{まさ}るべき
 教^せ育^いを愛^ま見^こに授^{さづ}けん」の
 願^{ねが}望^いの胸^{むね}の熱^{あつ}くして。

濡^ぬすも宜^なよ、紅^{あか}の露^{つゆ}。
 朝^{あした}別^{わか}れて夕^{ゆふ}に會^あふ
 それさへ妻^{つま}は淋^{さび}しきと、
 さるを、別^{わか}るゝ三千里
 などしも涙^{なみだ}なかるべき。
 君^{きみ}が遠^{とほ}國^{くに}に旅^{たび}立^たつを
 「妾^{わらわ}は再^{また}び見^みゆるの
 時^{とき}あらし」とて咽^{なみだ}びし音^ね
 響^{ひび}かざりしか君^{きみ}が胸^{むね}。

さなり、愛児の養育に
教育に、切ちの爾が願望
本意ならざりし旅衣
着せしめたるぞ運命哉。

エノック！君は知りまさん
アンニー常に待ち侘びて
數多の永き年の間
只管貞操を守りしを。

靈魂よ、爾は知りまさん

ヒリップ、常におとづれて
數多の永き年の間
偏に信實を盡せしを。

爾が、自身を「可憐」の
犠牲と捧げしけだかさを
神は高さゆみそなはし
いとらつくしみおはしけん。

心静かに和ぎて
迎りね、あはれ神の國

稱讚の歌は韻高く
君がゆくてに響きなん。

安息へよあはれ神の園
永劫に湧きつゝ絶ゆるなき
慰藉の泉君が爲
いよよ清らに溢れなん。

テニソンの詩畢

明治三十八年六月十日印刷
明治三十八年六月十三日發行

實價金六十錢

著作
所有

著者 入江雅次 郎
發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 大月 隆
印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目 青木 弘
印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目 株式會社秀英舎第一工場
東京市神田區錦町一丁目十番地 文學同志會

發兌元

大阪市江戸堀上通 文學同志會大阪支部
廣島市西横町 文學同志會中國支部
(電話本局千〇九十三番)

